研究ノート

# 物質使用障害を有する人への学生のスティグマ変化に関する研究
## ～ダルクとのソフトバレーボール交流を通じて～

久保木智洸[*1]・齋藤静保[*2,3]

**要約**

本研究は対人援助専門職を目指す学生において、物質使用障害の回復支援施設であるダルクの利用者および回復者スタッフとの交流イベントに参加することで、物質使用障害を有する人に対するスティグマが低減するかを検証した。学生を対象に、交流イベント前後で Drug Stigma Scale を用いた質問紙調査および自由記述による感想を答えてもらい、スティグマの変化を評価した。その結果、交流イベント後、Drug Stigma Scale の合計得点および全ての下位尺度において有意な低下が認められた。自由記述からも、学生の物質使用障害を有する人への理解が深まり、スティグマが軽減されたことが示唆された。本研究の結果は、対人援助専門職を目指す学生のスティグマ低減に当事者との交流が有効である可能性を示している。

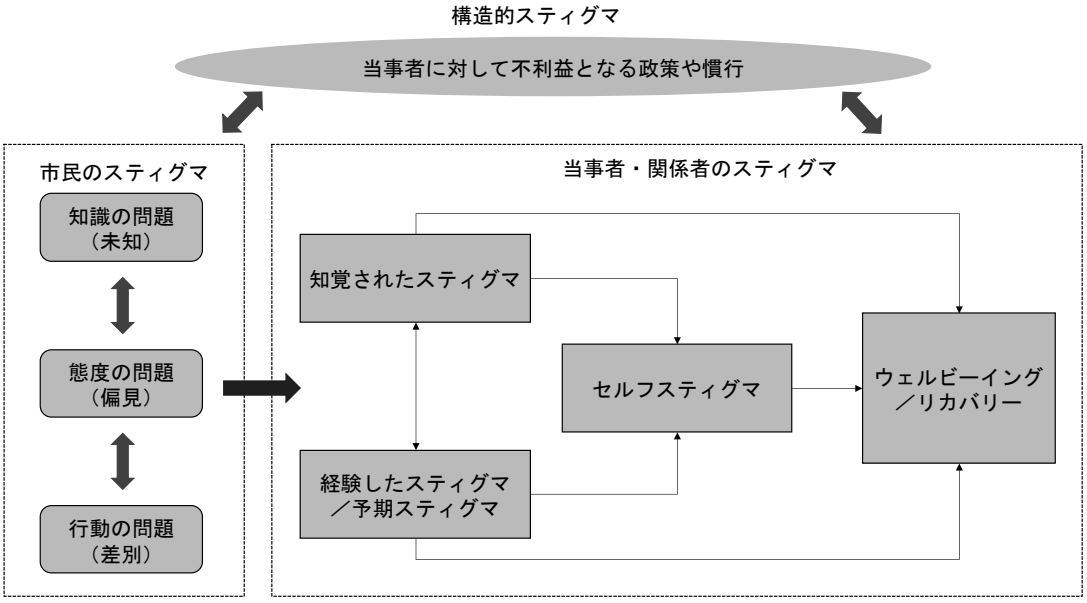
**キーワード：物質使用障害、スティグマ**

### 1．はじめに

物質使用障害を有する人[注1)]（People with Substance Use Disorder：以下､PSUD）にとって、スティグマは日常的に経験するものであり、回復に大きな影響を与える問題である。スティグマとは、特定の民族や宗教、障害者など社会的に弱い立場の人々に対して、その人の価値を下げるラベルをつける態度（偏見）や行為（差別）などを指す言葉である[1,2)]。精神疾患を有する人に対する一般市民のスティグマとしては、「こわい」「変わっている」「暗い」などがある[3)]が、PSUD へのスティグマとしては、「犯罪者＝悪いことをした人（悪者）＋依存症者＝意志の弱い人（弱者）＋生活困難者＝ダメな人（愚者)」[4)]というように、「倫理・司法」や PSUD の「人格」などの多様な側面から判断されたスティグマが根強く存在している[5)]。

それでは、スティグマは PSUD の回復においてどのような影響をもたらすのだろうか。山口は、精神障害者のウェルビーイングおよびリカバリーに影響をもたらすスティグマの種別と関連性を図 1 のように示している[2)]。市民のスティグマを知覚・経験することにより直接回復に影響がもたらされる場合もあれば、政策等の構造的スティグマが根本的に存在することにより PSUD が不利益を被る場合もあり、多様なスティグマが複雑に絡み合うなかで PSUD の回復にも様々な影響を及ぼしていることがいえる。

（所　属）
＊1 山梨県立大学人間福祉学部　　＊2 東洋大学大学院ライフデザイン学研究科ヒューマンライフ学専攻
＊3 特定非営利活動法人川崎ダルク支援会




（山口創生（2023）『こころの病気に対するスティグマと精神科医療』こころの科学228 p.19より筆者転記）
図 1　スティグマの種類と関連性

このような PSUD に対するスティグマは、一般市民に限らず、PSUD を支援する立場である対人援助専門職にも存在している。山本は、PSUD との関係の取りづらさ（否認や合理化、そのために嘘をつくこと、言葉が信用できないこと等）はソーシャルワーカー側の苦手意識を生み出し、振り回されないようにというガードができやすくなり、支援におけるバリアとなりうると述べている[6)]。また白川による医療従事者の PSUD に対するスティグマ調査でも、就労や友人関係、信頼感等の項目において高いスティグマが確認された[7)]。このように、日々 PSUD の支援に携わる対人援助専門職においてもスティグマが存在することが明らかとなっており、対人援助専門職のスティグマを低減することは、PSUD への支援における重要な課題である。その方策の一つとして、援助職を目指す学生の段階から PSUD に対するスティグマを低減させることが必要なのではないだろうか。

そこで本研究は、対人援助専門職を目指す学生が、物質使用障害の回復支援施設であるダルク（Drug Addiction Rehabilitation Center）の利用者および回復者スタッフと交流する機会を持つことで、PSUD に対するスティグマが変化することを仮説とし、検証することを目的とした。スティグマ変化の説明変数として当事者との交流を選択した理由は、精神疾患を有する当事者との交流体験や教育等がスティグマ低減に向けた取り組み（以下、アンチスティグマ活動）の有効な方策とされているからである[8)]。

本研究の調査対象として設定した A 大学では、2017年度～ 2019年度まで精神保健福祉士を目指す学生を中心として、B ダルクの利用者および回復者スタッフと年 1 回のソフトバレーボールイベント（以下、交流イベント）を通じた交流を行っていた。その目的の一つが学生の PSUD に対するスティグマの低減であり、この交流イベントに参加した学生は「知らない人を知ることで偏見や差別がなくなっていくと思う」とメディア へのインタビューに答えており、スティグマの低減という目的にはある程度効果があったものと推測される。しかし、その効果について量的な研究は行われていなかっ

た。交流イベントは2020年度以降、新型コロナウィルスの流行により中断されていたが、2023年12月に再開された。そこで本交流イベントの機会を利用し、学生の PSUD に対するスティグマの変化を測定し、交流イベントの効果について検討を行うこととした。本研究による知見を共有することにより、アンチスティグマ活動としての PSUD との交流の有効性を改めて示し、援助職を目指す学生のスティグマ低減の一助となることが望まれる。

## 2．研究方法

### （1）対象

A 大学にて2023年12月に行われた B ダルクとのソフトバレーボール大会に参加した学生を対象とした。交流イベントへの参加者は、A 大学で福祉を学ぶ学生34名、教員２名、B ダルクの利用者および回復者スタッフ11名であった。

### （2）交流イベントについて

学生と B ダルクの利用者および回復者スタッフを混合にした６チーム（1チーム７～８人程度）を作り、ソフトバレーボールでのリーグ戦形式の試合を行った。参加者は13時頃に A 大学体育館に集合し、会場準備や準備運動をした後、チームに分かれて試合を開始した。試合時間は13時30分～ 14時40分の１時間10分程度であった。

そしてソフトバレーボールの試合終了後に、チーム毎に車座になり20 ～ 30分程度の座談会を行い、B ダルクでの生活や日々の活動等について B ダルクの利用者および回復者スタッフの方から学生に話をしていただき、質疑応答を通した対話交流を行った。

### （3）使用尺度および質問項目

交流イベントのスティグマへの影響を測定するために使用した尺度は片山らが作成した Drug Stigma Scale[9]（以下､DSS）であった。この尺度は薬物使用に悩む人に対するスティグマを４件法（全くそう思わない～非常にそう思う）で量的に測定することができる自己記入式の評価尺度である。各質問の内容については、専門家や当事者、そしてその家族との協議を通じて内容的妥当性が確認されている[9]。また、自治体職員や医療従事者を対象とした調査により因子構造が安定していることや、併存的妥当性の確認もされている[10,11]。全24項目の合計得点に加えて、「不信」「軽視」「無価値化」「否認」「排除」「危険」の６つの因子から構成される18項目があり、数値が高いほど、その項目において回答者がより強いスティグマを持っていることを示している。この尺度は社会的望ましさのバイアスをコントロールするために、回答者は自分自身の意見ではなく周囲の人の意見を尋ねられる形で設計されている。なお本研究の対象者に合わせた教示を行うため、この尺度の教示のうち「あなたが所属している組織の職員が」の部分を「あなたの学校の友人が」と変更した。また事後の調査においては、教示に「あなたの学校の友人が、今回のソフトバレーボール交流会に参加したと仮定して」という文言を追加した。

また DSS に加えて回答者の属性（年齢・性別・学年)、物質使用障害についての学習経験の有無、薬物を使用した人との関わり経験の有無、交流イベントに参加をして感じたこと（自由記述。事後のみ）についても尋ね、合計29項目の質問と自由記述からなる質問紙調査とした。

質問紙調査は交流イベント前と後に２度行った。交流イベント前の調査はイベントの１週間前に実

施し、イベント後の調査はイベント終了から１週間後に、参加した学生が受講している授業の終了後に回答を依頼した。尺度への回答および研修後の感想記入に際しては、研修前後の回答者データを照合するための識別情報は記入しないようにした。そのため、交流イベント前後の回答者データは対応していない。

### （４）統計解析

交流イベント参加者の事前と事後の尺度合計点および６つの下位尺度については、得られたデータのヒストグラムの形や、そのサンプルサイズが小さいことから正規性と等分散性を仮定しないブルンナー・ムンツェル検定を使用し、有意な差があるかを検証した。また多重比較による誤検出を防ぐためにボンフェローニ補正を適用した。欠損データについてはリストワイズ削除法を用いた。効果量はｒを算出し、群間の差の大きさを評価した。すべての統計解析はHAD[12)]（ver17.１）を使用して行い、有意水準はｐ<0.05と設定した。また、自由記述の質的データについては回答数が少ないためコード化せず、全ての回答を記載した。

### （５）研究倫理

本研究の実施にあたり、山梨県立大学倫理審査委員会の承認を得た（受付番号：梨県人倫2023-５）。研究対象者には質問紙配布時に書面及び口頭にて説明を行い、同意を得た。研究参加の有無や回答の内容が授業の成績等には一切の影響を与えない旨を併せて伝えた。

## ３．結果

### （１）回答者の属性等について

回答者数は事前が27名（うち有効回答27名、男性10名、女性17名、平均年齢20.0歳±0.76）、事後が21名（うち有効回答18名、男性７名、女性11名、平均年齢20.2歳±0.67）であった。すべての回答者が交流イベント以前に物質使用障害についての学習経験があった。また薬物を使用した人との関わり経験については、事前回答をした27名のうち、９名に経験があった。

### （２）DSS 尺度の変化について

DSS の合計得点および６つの下位尺度について、交流イベント前後において有意な差があった。すなわち合計点およびすべての下位尺度において、交流イベント後に尺度得点が有意に改善していた。効果量は0.51から0.64の範囲（大きな効果量）であった（表１）。

表１　DSS の解析結果

| | 事前(n=27) | | 事後(n=18) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平均値（標準偏差） | 中央値 | 平均値（標準偏差） | 中央値 | p値 | 補正済みp値 | t値 | 効果量（r） |
| 合計得点 | 67.59（12.13） | 70.00 | 48.44（12.22） | 49.00 | ＜0.001 | ＜0.001 | 6.94 | 0.64 |
| 不信 | 5.48（1.28） | 6.00 | 3.61（0.97） | 3.00 | ＜0.001 | ＜0.001 | 6.63 | 0.64 |
| 軽視 | 10.37（2.20） | 11.00 | 7.55（2.14） | 7.50 | ＜0.001 | ＜0.001 | 4.90 | 0.56 |
| 無価値化 | 11.40（2.25） | 12.00 | 8.61（2.32） | 8.50 | ＜0.001 | ＜0.001 | 4.42 | 0.55 |
| 否認 | 6.96（0.89） | 7.00 | 5.22（1.80） | 5.00 | ＜0.01 | ＜0.01 | 3.81 | 0.51 |
| 排除 | 11.18（2.51） | 12.00 | 8.11（1.84） | 8.00 | ＜0.001 | ＜0.001 | 5.99 | 0.61 |
| 危険 | 6.37（1.41） | 6.00 | 4.11（1.64） | 4.00 | ＜0.001 | ＜0.001 | 5.82 | 0.60 |

### （3）自由記述

交流イベントの自由記述による感想は13名から回答が得られた。その内容は交流イベントが楽しかったというものや、貴重な経験であると感じ、当事者の方との関わりを肯定的に捉えているものがほとんどであった（表２）。なお、本論文では当事者の方についてPSUDという表現を用いているが、自由回答では別の表現が用いられている。参加者の率直な感想であるためそのまま記載する。

表２　交流イベント感想（自由記述）

| |
|---|
| たのしかったです。 |
| 想像していた人物像よりも明るく優しそうな方が多かったです。 |
| ダルクのメンバーの人達は大半が明るく陽気な性格な人が多いと感じました。かつて依存症であったことを感じない程でした。依存症になったとしても回復すれば私たちと変わらないなと感じました。 |
| ダルクの方が自分のチーム以外にも応援している様子から、仲間同士ですごく仲が良いこと、良い関係性なんだろうなと感じました。また交流の機会があれば参加したいです。 |
| 正直、見ためはかなりいかつい感じで少しこわさがあったのですが、実際に話してみるととてもフレンドリーですごく話しやすくておどろきでした。交流してみないと知ることはできなかったと思うので、参加できて良かったです。 |
| 実際に関わるのは初めてだったが、話してみるとなんともない普通の人だったし、ユニークな人柄の人が多かった。過去の過ちは変えることができないが、その分を取り返そうと一生懸命頑張っていると伝わった。 |
| 実際に依存症の方と交流して、彼らの見方が少し変わった。参加して良かった。 |
| 私も最初は怖いかな？と思っていましたが、交流してみると明るくて気さくで話しやすい人たちでおどろきました。楽しかったです。 |
| 最初はかなり見た目に圧倒されてしまったけれどいつも場を盛り上げ、仲間同士鼓舞し合う様子が印象的だった。私の中にも知らず偏見があると思うが、今回の関わりの中で、少し解消されたと感じ、福祉を学んだ人以外にもダルクのことや依存症のこと、人たちの魅力を知ってもらいたいと思った。 |
| 交流する機会があることにより、無意識のうちに抱いている偏見を見つめ直すきっかけになると考えた。また、ダルクの方々が仲間との結びつきが強く、孤立しない、させないためにも居場所は必要不可欠であると感じた。 |
| ダルクのメンバーさんが会場に入った時にその見た目から少し身がまえてしまったが、交流会全体を通して交流する前の依存症の方へのイメージは大きく変化した。依存症についてやダルクでの活動、ダルクに入るまでの人生の話などなかなか聞くことができない話を聞くことができ、貴重な経験となった。 |
| とても貴重な経験をすることができました。 |
| 今まで薬物依存を経験した人とは関わったことが無かったため、非常に貴重な時間でした。依存症は誰にでもなり得る可能性があることもわかり、自分とは無関係とどこかで思っていたかもしれないと自己覚知にも繋がった。 |

## ４．考察

本研究では、対人援助専門職を目指す学生とダルクの利用者および回復者スタッフとの交流による、学生の PSUD に対するスティグマ変化について検討した。その結果、交流イベント前に比べ、交流イベント後では有意にスティグマ尺度の点数が低下していた。

片山らによる先行研究において、臨床に従事している生活保護担当ケースワーカーや精神保健福祉センター職員を対象として、専門医および回復した当事者による３時間半の講義を通した協働研修を行うことにより、研修前後で DSS の合計点と全ての下位尺度の得点が有意に低下しており、スティグマの解消には当事者による講義が有効に作用する可能性が示唆されている[13)]。本研究においても、ソフトバレーボール交流および車座での対話により合計点と全ての下位尺度の得点が有意に低下していたことから、スティグマの低減には知識を得ることのみに留まらず、当事者と関わることや、直接薬物使用体験や思いを聞くことに大きな意義があるものと思われた。

自由記述の内容からは、参加者の多くがイベント前に持っていた PSUD に対するネガティブなイメージがイベント後に大きく変容したことが確認できた。「実際に話してみるととてもフレンドリーですごく話しやすくて驚きでした」という回答がみられたように、外見や過去の経験に基づくスティグマが存在していた一方で、実際に対話を行うことで PSUD をより人間的で親しみやすい存在として捉えるようになった参加者が多くみられた。このことは、PSUD に対するスティグマが直接的な交流を通じて減少する可能性を示唆している。

さらに、ダルクのメンバー同士の結びつきや、仲間意識について強く肯定的に捉えられているコメントも多く「仲間同士で鼓舞し合う様子が印象的」や「孤立しない、させないためにも居場所は必要不可欠」というコメントからは、物質使用障害からの回復過程において、治療共同体的な支え合いの場や仲間の存在がいかに重要であるか理解が深まった様子がみられた。

また、「依存症は誰にでもなり得る可能性があることもわかり、自分とは無関係とどこかで思っていたかもしれないと自己覚知にも繋がった」というコメントからは、物質使用障害が特定の人々だけの問題ではなく、誰もが直面しうる問題であるという認識が得られたことが示唆された。このような自己覚知は、参加者自身が持っていたスティグマに気づき自己の認識を修正するきっかけとなっており、PSUD に対するスティグマ低減のための重要な要素であろう。

最後に、多くの参加者による「また交流の機会があれば参加したい」「福祉を学んだ人以外にもダルクのことや依存症のこと、人たちの魅力を知ってもらいたいと思った」とのコメントから、このような交流イベントが PSUD の理解を深める有効な手段であることが示唆された。

ただし、精神障害を有する当事者との交流体験の直後と６ヶ月後の効果比較についてメタ分析を行った研究では、当事者に対する社会的距離と態度についての効果が交流体験の６ヶ月後には大幅に減少するという結果が出ている[14)]。このことから、PSUD との交流体験は単発的ではなく継続的に行なっていく必要があると考えられたため、今後もダルク等と共同プログラムの実施について検討し、学生に提供していきたい。そして援助職を目指す学生のスティグマ低減に寄与することで、将来、学生が援助職になった際に PSUD に対して適切な支援が行われていくことを期待したい。

## ５．本研究の限界

本研究にはいくつかの限界がある。まず、対照群を設けていないことや、交流イベント前後の回答データをマッチングしていないために、群間差の比較に留まる点が挙げられる。また、一部の参加者

はすでに交流イベント前に当事者の方との関わり経験があったため、介入の効果に影響を与えた可能性がある。この点についてはサンプルサイズが小さく、より詳細な分析が行えなかったことが課題である。また、介入がソフトバレーボールの試合と座談会であり、特に座談会による語りの内容には個人差があったと考えられることも本研究の限界点である。さらに使用した尺度の信頼性と妥当性については、大学生を対象とした検討は行われていない点も考慮すべきである。これらの点について、今後の研究ではより厳密な方法により検証する必要があるだろう。

## 6．結論

結果の解釈においては研究方法上のいくつかの限界はあるものの、本研究によって PSUD と対人援助専門職を目指す学生とのソフトバレーボールおよび座談会による交流が、学生のスティグマ低減に寄与する可能性が示された。今後、専門職の教育場面において、当事者の方と交流する機会を増やしていくことが求められるだろう。

## 7．利益相反

第２著者は特定非営利法人川崎ダルク支援会の職員であるが、本研究で交流イベントを行ったＢダルクとは別の施設である。本研究の客観性を確保するため、データ収集および統計解析は両施設のいずれにも所属していない第１著者が行った。その他の利益相反はない。

【注】

1）物質使用に対するスティグマ研究において、アメリカ国立薬物乱用研究所（National Institute on Drug Abuse：NIDA）は、言葉の使い方によるスティグマ助長の恐れを回避するため、「避けるべき表現」と「推奨されるべき表現」を提示している。そのため、本研究では NIDA の推奨する表記を採用し、薬物依存症者ではなく「物質使用障害を有する人（People with Substance Use Disorder：PSUD)」と表記している。

## 【引用文献】

1）Erving Goffman 著，石黒毅訳（2001)『スティグマの社会学　烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.
2）山口創生（2023)『こころの病気に対するスティグマと精神科医療』こころの科学228，16-23.
3）高橋清久，中西英一（2013)『わが国におけるアンチスティグマ活動を中心に』精神医学55（９)，929-940.
4）池田朋広（2020)『違法薬物依存症者へのソーシャルワーク』ソーシャルワーク研究46(２)，39-48.
5）信田さよ子（1999)『アディクションアプローチ　もうひとつの家族援助論』医学書院.
6）山本由紀（2020)『アディクションとソーシャルワーク』ソーシャルワーク研究46(２)，５-16.
7）白川教人（2023)『薬物依存症者に対する地域支援体制の実態と均てん化に関する研究』令和４年度全国依存症拠点調査研究事業 分担研究報告書.
8）Graham Thronicroft, Charlene Sunkel, Akmal Alikhon Aliev et al.（2022)『The Lancet Commission on ending stigma and discrimination in mental health』Lancet 400（10361),

1438-1480.
9）Munenori Katayama, Kanna Sugiura, So Fujishiro et al.（2023）『Factors influencing stigma among healthcare professionals towards people who use illicit drugs in Japan: A quantitative study』Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports, 2：e125.
10）片山宗紀，藤城聡，杉浦寛奈 他（2022）『薬物使用者に対する支援者のスティグマへの支援経験の影響―全国の精神保健福祉センター職員に対する調査から―』2022年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会ポスター発表 .
11）片山宗紀，藤城聡，杉浦寛奈 他（2023）『薬物を使用した人に対する医療従事者の意識・態度の調査』令和 4 年度全国依存症拠点調査研究事業 薬物依存症に対する地域支援体制の実態と均てん化に関する研究 調査報告書 .
12）清水裕士（2016）『フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育 , 研究実践における利用方法の提案』メディア・情報・コミュニケーション研究 , 1 ,59-73.
13）片山宗紀 , 藤城聡 , 稲田健 他（2023）『自治体の支援者のスティグマ解消策としての当事者と専門職との協働による研修の有効性』日本アルコール関連問題学会雑誌 ,24, 2 ,89-94.
14）Amy J.Morgan et al.（2018）『Interventions to reduce stigma towards people with severe mental illness：Systematic review and meta-analysis』Journal of Psychiatric Research（103），120-133.

# A Study on Changes in Students' Stigma toward People with Substance Use Disorder
## ― Through Soft Volleyball Exchanges with DARC ―

Kuboki Tomohiro [*1], Saito Shizuho [*1]

Keywords：Substance use disorder, Stigma

＊1 Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University
＊2 Doctor's Program in Graduate School of Human Life Design, Course of Human Life Studies, Toyo University
＊3 Nonprofit Organization Kawasaki DARC Support Association